

■ 特別公開講演会より

世界の再魔術化

——ポストモダンと宗教の復権——

ミシエル・マフエゾリ

満足圭江 訳

今日はお集まりいただき、また温かい歓迎を賜り、心より感謝いたします。

本日は、理論的な提案を少しさせていただきますが、その前にこれから申し上げることについて、皆さまに、あらかじめ、お許しをいただかなければなりません。

私は、いわゆる「日本学の研究者」ではなく、単なる日本の愛好家にすぎません。したがって、ここで申し上げることは明らかに、私の知っている地平からの指摘であり、すなわちヨーロッパの観点からの指摘であるという点についてです。

また、本日は、皆さま方東洋哲学研究所で講演をさせていただくことを大変に嬉しく思っております。私は、創価学会の皆さま方とはさまざまな交流があり、だいたい昔のことになりますが、池田SGI会長にも二度、三度とお目にかかり対話をさせていただいたことを、大変に素晴らしい出会いであったと感謝しております。

創価学会がどのような立場で運動を進めておられるかはよく存じ上げておりますので、フランスの地において、必要な時は常に擁護してまいりました。

「日常生活への根」と「想像力の翼」

私は、パリのソルボンヌ大学において、「現在性・日常性研究センター」を主宰しておりますが、私が極めて重要だと認識するこの「日常生活」というものについて、皆さま方は大変深いご理解を、すでにおもちだということです。

少し逆説的なやり方ですが、日常のレベルにいることがなぜ必要なのかを示すために、ドイツの偉大なる社会学者にして経済学者、政治学者であったマックス・ウェーバー (Max Weber) を思い起こしてみましよう。非現実的であつてはならないし、根無し草であつてはならない。抽象的に考え、生きているのではダメだということです。

むしろその逆に、具体的に日々の生活を形づくっているものの中で考え、生きることが大事なのです。そこに挑戦があるのです。宗教的観点の上でも、また、私にとっては、理論的な観点でも、このことが挑戦なのです。

また、別な観点から申し上げれば、世界中の全ての人々にとって問題となるようなものを提起するやり方が、「イマジネール (imaginaire)」(想像上のもの)の数理です。この点については、パリで、もうひとつ別の研究所である「イマジネール研究センター」を設立し研究しております。

さて、私が思いますには、現在進行している社会的変動と呼ばれている、社会の底流の大きな変化を、もし本当に理解したいと望むのであれば、次の二つの角度、日常性に根を張りつつも、私たちを包みこむ、イマジネールについて思索することが必要です。この両者をひとつのイメージで要約すれば、それは、「根っこ (les racines)」と「翼 (les ailes)」と言えましよう。

時代の共通認識

あたりまえのように話していますが、人間という種の特長性は、「自らについて語り、自分が何ものであるか」を語ることです。人は、自らの物語 (histoire) を語るることによってのみ自分が存在するのです。

家族も、一族の物語を語ることによって、その家族であり得るのです。集団も、その集団の物語を語り合うことによって始めて、その集団たり得るのです。さらに、国にも物語がある……というように、存在するためには、自らについて語らなければならないのです。私たちを包みこんでいる何かを。その何かこそが、わたしたちが自分自身であるために、わたしたち自身を形づくっているものなのです。

歴史的、理論的な二つの実例を挙げてみましょう。ミシェル・フーコー (Michel Foucault) という、おそらくは二十世紀の最も偉大なフランスの哲学者は、それぞれの時代の「エピステマー (epistémè)」(時代の共通認識) と呼ばれるものを念頭にもっていないければ、時代を把握することがいかに不可能であるかを示しました。

この「エピステマー」は、ギリシャ語で「認識」を意味し、自分自身について語ることで、純粹に抽象的な認識を指すものではありません。根を張り、有機的に構成する、そういう認識のあり方をフーコーは「エピステマー」と呼んだのです。彼はさらに、人類

の歴史をみれば、実に、複数の「エピステマー」が存在し、複数の具体的な認識の仕方があり、有機的に構成された複数の認識があったことを指摘しています。

例えば、ギリシャ・ラテンの伝統を見れば、ギリシャの各都市は各々の神話をつくりあげ、その神話に応じて、都市国家が形成されました。例えば、アテネの人々による都市国家の解釈は、スパルタの人々による解釈とは違っていたのです。アテネ風の生活がある一方、スパルタ風の生活もありました。

この違いは、ひとえに「知的風土 (climat intellectuel)」の違いに端を発していたのです。まさに、これが「イマジネール」です。

中世でも同じでした。ヨーロッパには、神学の解釈があるからこそ、司教区や同業組合に基づいて、都市が組織されました。

以上の二つの例は、神話とか神学というひとつの言説 (ディスコース) が、いかに、包括的な次元を、構造的な次元をもつかをよく示しています。

ゆえに、(他の理論的表現も多少あるかと思いますが) ひ

と言えば、「現実 (le réel)」は、「非現実 (l'irréel)」を通してしか理解できないということです。「存在するもの」は、かえって、「存在しないと思われているが、実際には、含意と重要さをもっているもの」を通してしか理解できないのです。

これこそが、再び私たちを長期にわたって形づくっている「集合無意識」の種概念 (essence) なのです。

近代の特徴①「目的をもつ時間」

二つの時代を取り上げて、先ほど申し上げたことがどういう意味かを示してみたいと思います。その時代とは、「近代」のイマジネールと、「ポスト・モダン」の時代のイマジネールとであります。

私の言う近代とは、伝統的に、特にヨーロッパでは、十七世紀に始まり二十世紀の中葉ないしは二十世紀の末に終焉を迎える時代です。歴史学者が「近代 (les Temps Modernes)」と呼ぶところのものが構築された長い時間を指します。

再び図式的なやり方で提示しますと、この近代には

三つの大きな特徴があるとされます。

第一の要素は、「時間性」についてです。ある時代をよく理解するには、時代特有の時代性を把握することが重要です。この時間性とは、束の間の時間があり、過去、現在、未来という時間があることですが、この中に重要な側面が含まれているのです。

すなわち、理論的な観点で申し上げれば、「目的性をもった時間」という近代の特質です。つまり、すべてのことが「到達すべき、遠くにある目的」に向かっていくということです。ある意味では、すべてが、西欧の遂行性 (performative) だったのです。この西欧の遂行性が、いかに社会を未来に向かって構成してきたかはるかかなたにある完璧な社会を求めて、すべてのエネルギーをいかに達成すべき目的へと向けてきたか。しかし、その目的は随分とあとの将来にしか達成されないのです。

更に、十九世紀に編み出された大いなる哲学的システムがあります。それは、他のさまざまなシステム、特に都市組織などに大きな影響を及ぼしました。それ

こそが、ヘーゲルであり、ヘーゲル哲学でした。

なかでもその（大文字のHで始まる歴史という、いわば唯一絶対の歴史としての）歴史哲学です。この考え方にあっては、人類は、「野蠻」であつたとされるAという地点から、漸進的に、Bという「絶対的な文明化」の地点へと進歩するものとして位置づけられているのです。まさに「大いなる進歩という神話」を徹底してつくり上げたのです。

この神話が、西欧全体にわたって、都市組織の中軸を構成していきました。この歴史哲学と進歩という神話こそが、私が「未来への傾向」と呼んでいる近代の第一の特徴です。

近代の特徴②「存在の合理化」

第二の大きな特徴も、第一の特徴と絶えず連動しております。そこには、構成のシステムが常にあるのです——。それは、存在の「合理化」を一方的に強調することです。

これは、マックス・ウェーバーの『プロテスタンテ

イズムの倫理と資本主義の精神』より借りた表現ですが、ウェーバーが、「一般的な合理化（*rationalisation*）を明らかにする際、合理性というものが単

に哲学上の問題であるだけではなく、むしろ、いかに日常的現実になっていくのかということを示しました。すなわち、社会的生活の「合理的な」形成ということです。ちなみに、この「社会的」という言葉自体も、この時代につくられたのです。その意味するところは、合理的に共に存在することを指しています。個人という存在であれ、集団という存在であれ、すべての要素は、合理性に従わなければならないのです。その他の要素は、感情であれ、情熱や美意識等々であれ、すべて排除されていきます。まさに存在の一般的な合理化であります。

この合理化のプロセスの特質をご説明するために関連して申し上げます、トーマス・クーン（Thomas Kuhn）という英国の偉大なる科学・技術史家が「パラダイム」という言葉を使って、このプロセスについて語っております。クーンによれば、西欧的なパラダイムがあり、

それが認識のモデルとなり、雛形となっているのです。彼は、この近代的パラダイムの大きな特徴を、ラテン語の言葉を使い、「合理性のヴィア・レクタ(via recta)」、すなわち合理性の「直道」と名づけています。

より速く、より遠くへと進むために、すべての不要な荷物は置き去りにして、突き進むのです。人生の魅惑に富んだ豊かさの次元、魔法にかけられたような道などは、まさに無駄なものとして、脇に捨てて、ひたすら直線的な道を突き進むのです。

先ほど時を超えた非時間的な軸について話しましたが、ここに、ある意味で、何が近代の大きな特徴となるのかに關しての哲学的な軸が存在するのです。つまり、目的を指して直線的に進むという行き方であり、二次的とみなすものに煩わされることなく、まっすぐの道だけを追い求めるのです。

近代の特徴③「距離をおく」スタイル

近代のもつ第三のそして最後の特徴を表す言葉として「スタイル(様式)」という語を示したいと思います。

この言葉は、美術史からきた語です。これまで漠然とした意味あいの中に浸り切っていたので、風土(climat)という表現が使われてきましたが、ここでは、この語の最も語源的な意味で、また最も強い意味で「スタイル」という言葉を提示したいのです。

それは、視覚的なスタイル(様式)であります。私がこう申し上げる時、その意味するところは、「距離をおく」ということです。価値のあるものは、遠くにあるものでなければならず、最も広い意味での言葉の抽象化のプロセスです。抽象化が行われるということは、対象から「身を引いて」眺めるということであり、その時には、その人はもはや「当事者」ではなくなってしまうのです。したがって、視覚的な様式の本質的概念とは、距離をおき、対象から遠ざかるということです。これもまた近代の大きな特徴であると私は考えております。

更にこの「距離をおく」というあり方は、三つの本質的要素を通して容易に表われてきます。ひとつの社会を理解する時に、この三つの要素を通して見ていけ

ばよいのです。

「自然」と距離をおくと、自然の文化化が起こり、やがて自然そのものを忘れてしまうのです。自然と距離をおき、「他者」との間に距離をおくと、もはや共同体など存在しなくなり、優先されるのは常に「個人」ということになります。このようにして、個人が、自然から切り離され、「神聖なるもの」から距離をおき、神からも距離をおくようになります。そこでは、神も極めて遠い存在となります。神はいわば天上世界に送り返されてしまっているのです。

このように、自然という他者、集団という他者、神聖なるものという他者——他者とどのようにに関わり、他者をどのようにに理解するかということを示す三つの「距離をおく」ことが存在します。私は、このことが視覚の様式の大きな特徴であると考えております。

最初概念に戻って、近代の時代精神であるイマジネールは、次の三点によって特徴づけられます。すなわち、①合目的化された時間②一般的な合理化③距離をおくこと——です。

再び、古典的な社会学的定義を用いますが、これが有名な「世界の魔術からの解放」への帰結です。マックス・ウェーバーは、「魔術を解く《démagification》》という言葉を使っております。

すべての分野についてさまざまなやり方で示してまいりましたが、つまるところ、この魔術からの解放がある種の「世俗化」、ある種の「非神話化」を構成するようになっていくのです。もちろん、どのような形で現れるにせよ、これは人間存在の素晴らしい側面であるわけですが。

ポスト・モダンの特徴

①「現在という時」に価値をおく

さて、では、私の講演の第二部へと移ってまいりましょう。ここでは、事態をよく理解するためには、適した言葉を見つけ出さなければなりません。これまで申し上げてきましたように、近代というモデルの突然の終焉が訪れるわけではないのです。むしろ、この近代のモデルの緩慢な「飽和」が見られます。

私は、この「飽和状態」という言葉を、化学の用語としての意味あいで使いたいと思っております。疲労の飽和状態になった身体がもう歩けないように、さまざまな要素が飽和状態に達したところから、いかに、他の新たなものが再生しつつあるかを見ていかなければなりません。

これは、ある種、私の仮説なのですが、近代は、突然の終焉で終わるのではなく、したがって、あまりにもしばしば習慣的に語られているような「革命」によって終わるのではないのです。むしろ、その逆に、この「飽和状態」になってゆくプロセス」しかないのです。

ニーチェの次の言葉が、私の言いたいことを大変によく表しています。すなわち、「真の革命というものは、鳩の歩みに合わせて進むものだ」。

本当の変化というものは、まさに鳥の歩みのように、静かな小さな歩みの蓄積で、なされていくものなのです。ここで私の講演の第二部は終わりとなります。

ある人々が——私もその一人ですが——「ポスト・モダン（脱近代）」と呼ぶものについても、ここ

で三つの特徴を挙げてみたいと思います。

先ほど述べた近代の大きな特徴の後に現われた傾向ですが、これは分析するのに困難なものです。なぜならば、今まさに生まれようとしている現象であり、特に若い世代に顕著に見られるものだからです。明らかに若い世代こそが、この胚胎している新たな傾向の保持者なのです。私たちの目の前でまさに生まれようとしているものを目撃する時、私たちは、慄き、震えるような思いで注目します。が、それは避けがたいものとして、そこに確かに存在しているのです。

生まれつつある「ポスト・モダン」の特徴を端的に示すために、三つの特徴を挙げてみましょう。

第一の要素は、もちろん、先ほど、近代のところで示した「未来を志向する合目的な時間」と真っ向から対立しています。少々学術的な用語ですが、「内在的(immanentist)」という言葉です。現在を強調することです。ラテン語の表現を借りれば、「カルペ・ディエム(carpe diem = 今を生きよ)」となります。「今、ここで楽しめ」という意味です。私が思うには、こうした合目

的な時間の崩壊が、ますます人間存在の創造的次元に重点をおく考え方をもたらしたのではないでしょうか。

先ほど、ニーチェの言葉を引用しました。若い世代に端的に表れています。自身の人生をアート作品とするような考えに、さまざまな形で人々がはまり込んでいるのが見られます。ここで一番大事なのは、言葉の本来の意味での創造性が、遠いところのものとしてではなく、むしろ日常のレベルで強調されているということです。世界の日常的創造というわけです。

ポスト・モダンの特徴

②「身体性」「全体性」の重視

ポスト・モダンの第二の特徴は、単に、合理に対立するだけではありません。

前に述べたように、何かを強調するものですが、これを表現するには、より偽りのない適切な言葉を見つけ出さねばなりません。「身体」に、すなわち個人の身体や共同体という集団としての身体に、再び意味を与えるようなものです。

したがって、身体を飾るものとして、ファッションといったものが重要になりますし、ダイエット、筋力トレーニングなどが重要になってきます。いわば、「周囲の状況における身体重視主義 (corporeisme ambiant)」ともいうべきものです。しかし、この言葉は決して蔑称的な意味は含んでおらず、人間存在を根本的に、身体も含めてより全体性の中でとらえていこうとする考え方です。したがって、ここでは、身体の一部にすぎない頭脳だけを問題にするのではなく、「存在の全体性 (totalité de l'être)」でとらえていくわけです。この全体性においてとらえようとする、こうした「身体重視 (corporeïsme)」の考え方は、確かにポスト・モダンの第二の大きな特徴であると考えます。

仮説的ではあるものの、この過程を特徴づけ、確かに時代精神を反映しているものであるように思われる言葉が、「生活の審美化 (esthétisation de la vie)」です。この審美化とは、対象として分離したものを問題にする「美学 (esthétique)」とは違います。(審美化の語源である)ギリシヤ語の「アイステーシス (aisthesis=感覚)」という

言葉の意味は、情熱や共感的感情を共有したりすることです。この審美化は、語源に最も近い意味のそれであり、社会生活が、情熱や共感的感情をもつことによって多様になるということです。自然に対する感情もあれば、宗教的感情もあるでしょうし、音楽的感情、スポーツの感動など、さまざまあるでしょうが、こういう感情であつてもよいのです。先ほど申し上げたように、「風土」のイメージで私たちを包みこむような「共有する感情という環境」が存在するのです。

ポスト・モダンの特徴

③「他者と触れあう」スタイル

第三の要素は、前述の「スタイル」といったものです。ここでも語源をたどることが大事です。「スタイル」は、時代が自らを表現する万年筆 (pen) であり、時代がなぜ自らをこのように指し示すかを示すものです。その意味で、先ほど述べた通り、時代の特徴的なスタイルのことです。

ポスト・モダンでは、「触知的なスタイル (style tactile)」

となります。具体的な意味で「触れる」ことです。つまり、「相互依存」のプロセスであります。

先ほど、近代での他者性について申し上げたことを思い出してください。まず自然との関係も、近代とは異なった関係が生まれれば、それがエコロジーへの感受性となります。他者との関係が変われば、共同体が發展します。私が、社会学的に「部族 (tribus)」と名づけている小集団の出現がそれです。そして、日常生活の中で当事者となるような、神聖なるものともうひとつ別の関係も生まれます。

こうしたポスト・モダンを特徴づけるスタイル(様式)とは何かという問いについては、私は、「バロック」様式であると考えております。この様式が、他者と触れ合う何かをもっているからです。先ほどから申し上げているように、自然という他者と触れ合い、他の集団という他者とも、神性という他者にも触れる様式だからです。これが、私の言うポスト・モダンの第三の要素です。

「世界は東洋化しようとしている」

更にもうひとつ言葉を提案しなければなりません。

特にエドガー・モラン (Edgar Morin) をはじめ幾人かの友人たちが、こうした時代精神を描き出すために提起したフランス語の造語を申し上げなければなりません。それは、「ルリアンス (reliance ≡ 結びつき)」という概念です。先ほど申し上げたことを思い出してください。もはや「距離をおく」ではなく、よりシンプルな概念に移行しているのです。この言葉は語源的に言えば、ラテン語の《何かに結びついている状態》を意味する概念です。

ここで第一に重要なことは、本当の変化が始まっているということ。エピステーメという、根底の変化なのです。この概念は、まず関係があるということです。再び、神性と、自然と、他者と関係を結ぶことなのです。この「結びつき」のパースペクティヴ（見通し）の中で、ある種の感情の文化が発達していきます。それは、純粹に合理的な要素だけではなく、宗教の基

盤自体に、ラテン語で「プリムム・レラツイオニス (primum relationis ≡ 関係の優位性)」と呼ばれるものが存在し、重視されます。

この「結びつき」の概念は、常に現在に結びつけられており、これまで述べた三つの要素を統合しています。ここに、世界の「再魔術化」とも呼ばれるものの特徴が現れております。現れ方はさまざまですが、重要な時代の後、すなわち三世紀ないし四世紀のサイクルである「再魔術化」のサイクルの後、大きな特徴は見られるものの、もちろん微かな兆候としてしか指摘することはできないものもあります。この兆候という言葉は、もちろん指摘 (index) やポイント点を意味しています。真実や胚胎しているものを指し示す兆候や要素があります。先ほど、お話ししたことを要約すれば、近代の「目的化された物語」とは異なり、「運命」という言葉がキー・ワードとなります。運命のまわりには、遠くを目指す「超越」など存在しません。あるのは、むしろ「内在性」なのです。

ただひとつのものを重要視するのではなく、多様性

の形態を重視するのです。多様なやり方が存在し、議論をしようと思えば膨大な例を提示することもできるでしょう。そこで見られるのは、「東洋的なシンクレティズム（混淆主義）」を示すような何かです。それは日常生活のレベルに、明らかに数多く存在します。

世界の「再魔術化」のなかで明らかになっている三つの大きな特徴は、映画の中に、書籍の中に、ロール・プレイ・ゲームの中に、さらにすべての中に、それ相応に存在するのです。

最後のパラドックス（逆説）が残りますが、それは、トポロジー（位相幾何学）の用語で解釈しなければなりません。位相幾何学によって、ひとつの時代が理解されるからです。かつての習慣的な図式は「線形的な図式」でした。Aという地点からBという地点に移動するという図式です。また一方で、「代替的な図式」としての「ニーチェの円環」すなわち「自己自身へ回帰していく」という図式もありました。

私がここで提起したいのは、「螺旋状のイメージ」です。古いものが蘇ってくるのを人は見るわけですが、

それは、まったく同じレベルで蘇るわけではないからです。

私にとって、ポスト・モダンの定義は、「擬古主義」と「テクノロジの発達」の相乗作用（シナジー）なのです。「宗教回帰」と「インターネット」が同時にあることにより、効果の減速が起ころ。まさに本当の意味での「逆説」です。もちろん、他のレベルもあり得るわけですが。

私の視点では、この「再魔術化」が回帰しながらも、同時にウェッブ・サイトがあり、ブログがあり、討議フォーラムがあり、インターネットがあるようなパラドックスが、生まれつつあるポスト・モダンの特徴づけるもののなのです。このような「螺旋状のイメージ」が、私にとっては、現在社会を特徴づけているように思えるのです。

最後に、ここで日本の皆さま方に申し上げたほうがよいのか否か私はわかりませんが、ヨーロッパでの講演でいつも申し上げていることをいしましょう。しかし詳しく展開することは控えていただきます。

近代が世界の西欧化であったのと同じように、今の変化は、世界の東洋化 (orientalisation) を示しているように私には思えます。これまで私が指摘をさせていだいたすべての大きな特徴はみな、むしろこの「東洋化」に帰着するのです。しかしここでは、これ以上、展開はいたしません。

結論として申し上げたいのは、私にとって、こうした変化は、ある時代の生命力の現れ方としてのプロセスであって、「破局的ヴィジョン」をもつ余地はありません。実は、「ひとつの世界の終焉」といつても、世界というものの終わりではありません。それは私が指摘した通り、「飽和」のプロセスによってのみ、ある世界が終焉することではないのです。

この原理から出発すれば、適応しながらも、時代の「真の生命力」といったものが、「世界の再魔術化」を通して存在していることを実によく示す多くの要素があることに気づくのです。こうした時代の「生命力」を表すために、「生氣論 (vitalism)」を機能させることこそ、私ども知識人のなすべき仕事なのです。

なぜならば、実のところ、生命それ自体は続いているからです。

(ミシエル・マフエゾリ／パリ第五大学教授)
(訳・まんぞく たまえ／東洋哲学研究所海外研究員)

(本稿は二〇〇六年十月八日、東京で行われた当研究所主催の特別公開講演会の内容をまとめたものです)